

二番茶後のせん枝による炭そ病の防除

農業研究センター 茶業研究所

担当者：下門 久

研究のねらい

茶は保健飲料として見直されている中で、農薬を中心とした病害虫防除には反省が求められている。このため、生物的、耕種的防除法を主体とした省農薬防除技術体系を実用化し、消費者ニーズに応えた緑茶生産を図ることが重要である。

そこで、水俣市（標高 300m）と阿蘇郡蘇陽町（標高 600m）の生産現場において、耕種的防除法の一つとして、二番茶後のせん枝が炭そ病の発生に与える影響や、翌年の一番茶の生育、収量に及ぼす影響について検討した。

研究の成果

- 試験期間中の夏から秋の気象は、平成5年は多雨、寡照、低温で、炭そ病が激発した。平成6年は干ばつの被害が発生するほど少雨、高温で、炭そ病の発生は少なかった。平成7年は、水俣市では少雨で、炭そ病の発生は少なかったが、蘇陽町では降水量が多く、秋芽に炭そ病が多発した。
- 試験園での炭そ病の発生は、水俣市及び蘇陽町試験地ともに、深刈り区が最も少なかった。また、浅刈り区も対照区の50%以下の発生であり、せん枝による炭そ病の発生抑制効果が認められた(図1)。
- 翌年の「一番茶収量は、水俣市試験地では干ばつの影響を受けた平成7年を除くと、せん枝区が対照区に比べて同等以上の収量であった(図2)。
また、蘇陽町試験地では、浅刈り区は対照区と同等の収量であったが、深刈り区は減収した(図3)。
- 以上の結果から、二番茶後にせん枝を行い、葉層を刈り落とすことによって、その後の炭そ病の発生を抑制できるので、せん枝は炭そ病の有効な耕種的防除法である。

普及上の留意点

- せん枝は二番茶摘採後なるべく早く行い、深さは茶園の立地条件や樹勢などを考慮して決める。

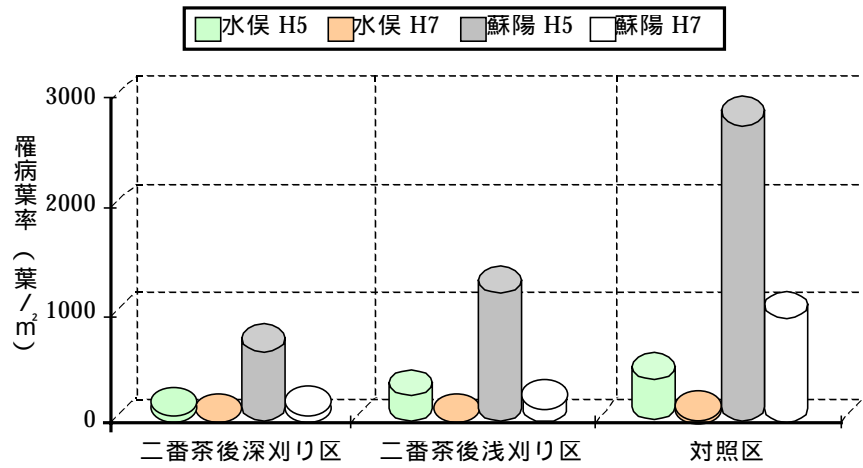


図1 炭そ病の発生（10月調査）

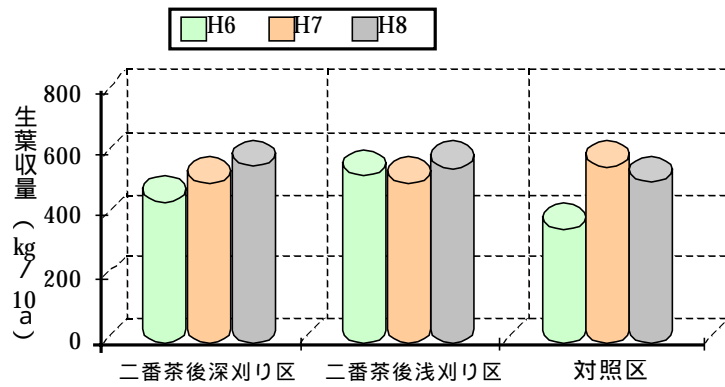


図2 一番茶の収量（水俣市）

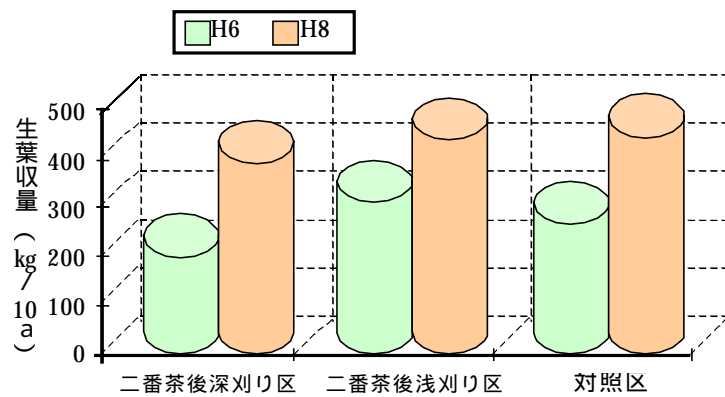


図3 一番茶の収量（蘇陽町）